

SALAD BOWL

リニューアル号
Vol. 8

～Fresh material sent direct from the real medical scene～

東葛病院・代々木病院から 医師を目指すあなたへ

ご挨拶

医師を目指すみなさん、こんにちは！代々木病院の医学生室の服部です(〇)／今回のサラダボウルは、東葛病院研修医一年目の上村和清先生（かみむら かずきよ）が参加している「隅田川医療相談会」の様子と上村先生にボランティア活動への思いをインタビューしてきました。それでは、ご覧ください！

隅田川医療相談会

隅田川医療相談会とは、一人ひとりの「医療、仕事、暮らし」を守るため、毎月第3日曜日を中心に、隅田公園（東京都台東区）で野宿者や生活困窮者を対象に主に無料の健康相談・生活相談・生活保護の申請への付き添いを行っております。（パンフレットより）

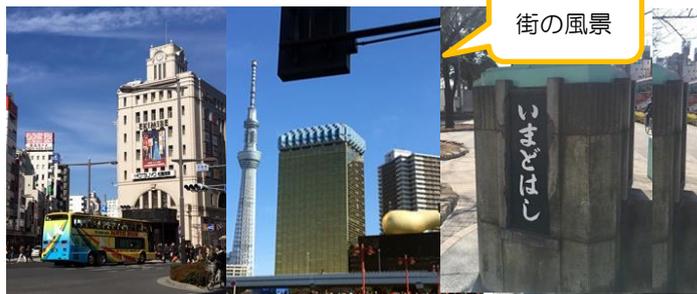
今回は隅田川医療相談会に服部も参加してきました！場所は、浅草駅から近い隅田公園。ボランティアスタッフのみなさんは、医師、看護師、薬剤師、社会福祉士、理容師、鍼灸師、法律家、事務、看護学生のような職種から30名程が集まりました。医療相談（問診、簡易的な診察室）、生活相談、法律相談、鍼灸、散髪、アパート相談、など各ブースの設営をしていきます。設営をしている間にも、そくそくと相談者が集まります。

服部は医療相談ブースに来られた方の診察前の問診を担当しました。問診したのは、右足の膝の痛みで杖をついて歩いていた60代男性。若い頃から北海道で土木作業の仕事をしていましたが、怪我で仕事が続けられず、生活保護を申請。しかし紹介された部屋が相部屋でプライベートが守られていませんでした。その為、部屋

を出て、東京に仕事を探しに来たが仕事には就けず、上野で路上生活をしていました。この日は、医師の診察を受け、近くの病院の整形外科へ紹介し次の日、受診することになりました。また、今後の生活の立て直しを目指し、東京で生活保護の申請をするため、社会福祉士の方との生活相談も行いました。お話を伺っていくうちに、危険が伴う土木作業の現場で、過去何度も足の怪我をして、仕事を続けていくことが出来なくなってしまったことがわかってきました。ここからは、上村先生のインタビューです↓

服部） 上村先生、おつかれさまでした。先生は、ボランティア活動を何年くらいやられているんですか？

上村） 活動自体は、2017年3月で8年目に突入します。隅田川医療相談会に参加し始めたのが、16年夏から始めて、今回で7回目です。



街の風景



設営の様子

服部) ボランティア活動を始めたきっかけを教えてください。

上村) 私は、東京都新宿区出身で、新宿には大小の公園があるんですよね。自分が小学生の頃にバブルという好景気の時代があって、その時期でも路上生活者の方はいたんですが、「可哀想だな」と思うだけで、特に何もしてあげることはできませんでした。

実は私、医学部に入る前に、4年制の大学を卒業しています。医学部に入学することになり、2回目の大学生となったのですが、大学生は、自由な時間が沢山あるというのは知っていたので、その自由な時間を使って社会活動をしたいなと思っていました。医学部に合格した直後にインターネットで「ホームレス支援」と検索すると、新宿区内で活動している団体があることを知りました。集合場所である新宿中央公園に行ってみたら、ここ（隅田川医療相談会）と同じように何十人もボランティアの方がいて、ワイワイやっていました。学生の私でも炊き出しのご飯を配ったりと、戦力として使ってもらえたんですよ。その事が凄く楽しくて、とりあえずボランティアに行けば、やることは沢山あって、参加すれば「おお、また来たか」と、言ってもらえたんですよ。大学のある福井の地域では何も出来なかったのですが、長期休みを使って、実家の新宿に帰って来て活動をやっていました。

服部) 一回につき何件くらい医療相談があるのでしょうか？

上村) 医療相談は一件もないこともありますよ。

服部) え、一件もないこともあるのですか！？

上村) 一日が終わった時「今日、深刻な相談何もなかったね」というときもありますし、病院への紹介状を書いたのも今日で2回目です。実際には、重症な患者さんはそれほどいません。私がこの7年間、活動に関わっていて、状態が悪く救急搬送になった人は、2~3人くらいです。実は、この活動の肝心な所は、継続的に行っていくこと。路上生活のおじさんたちと仲良くなって、彼らに隅田川医療相談会の場所にいけば、あの団体、あの人がいる、ということを知ってもらうということが大きいんです。今は皆さん（路上生活者）元気で生活されていると思うんですが、生きていれば、ある時、ガクンと体力が落ちる時がくるんですよ。それで、ガクンときた時に、「俺、もうダメだから、生活保護受けて、アパートに入りたいよ。」という希望をパッと捨て、「じゃあ、一緒に役所に行きましょう」と、はたらきかける。そうなるまでは、どれだけ勧めても「俺は、生活保護は受けない」という人が多いです。なので、路上生活のおじさんたちと仲良くなるという、凄く地味なことが圧倒的に重要だと思います。私は今、この団体とは別な2団体にボランティア登録していますが、どのボランティア団体へ行っても、そうなんです。

服部) 路上生活者支援では、医師はどんな役割なのでしょう？

上村) 路上生活者支援というのは、所謂、ソーシャルワークなので、その中のごく一部に医療があるだけなんです。医師よりもむしろ社会福祉士、精神保健福祉士の方達の活躍の場が多くあります。医師の役割では、医療が必要だという場合にパッと出て行って、すぐ動けるということが理想だと思いますね。普通に暮らしている人の一生を考えても、病院にかかるなんてごく一部分ではないですよ。それよりも借金や経済的なことで困っていたり、仕事がないなどの相談の方が圧倒的に多いので、医療はごく一部だと思うことが大切です。

服部) これから医師を目指す、医学生・高校生のみなさんに一言、メッセージをいただけたらと思います。

上村) 月並みな言葉になってしまいますけど、医師は社会的なことに、目を向けるべきだと思うんですよ。新聞も読むべきだし、こういった活動に、一回でもいいから来て、さっきも言った医療なんて人の生活のごく一部なんだっていう所を見てもらいたいです。医師ってオールマイティみたいに思ってしまうがちなのですが、必ずしもそうではないんだよっていうのを実感してもらいたいですね。

服部) おつかれさまでした。ありがとうございました。

上村) ありがとうございました。



上村 和清医師
東葛病院初期研修医

